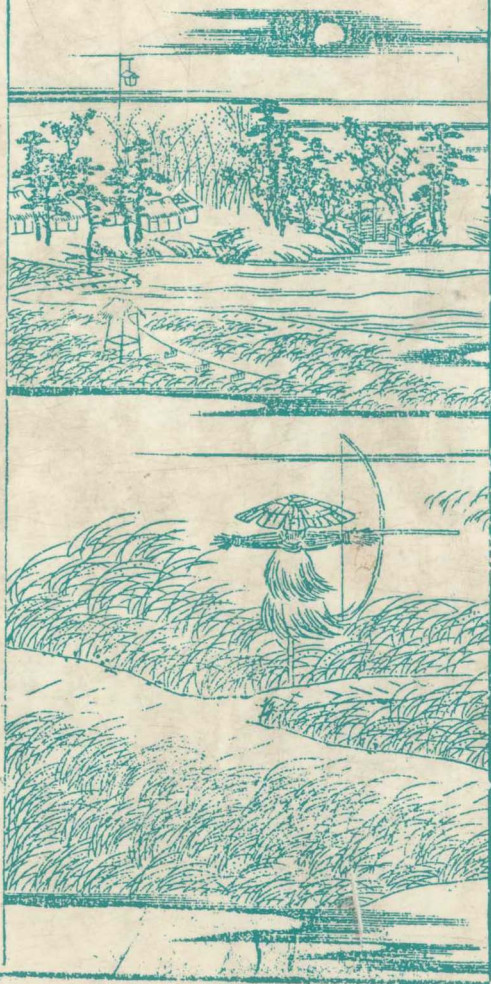


森 敦

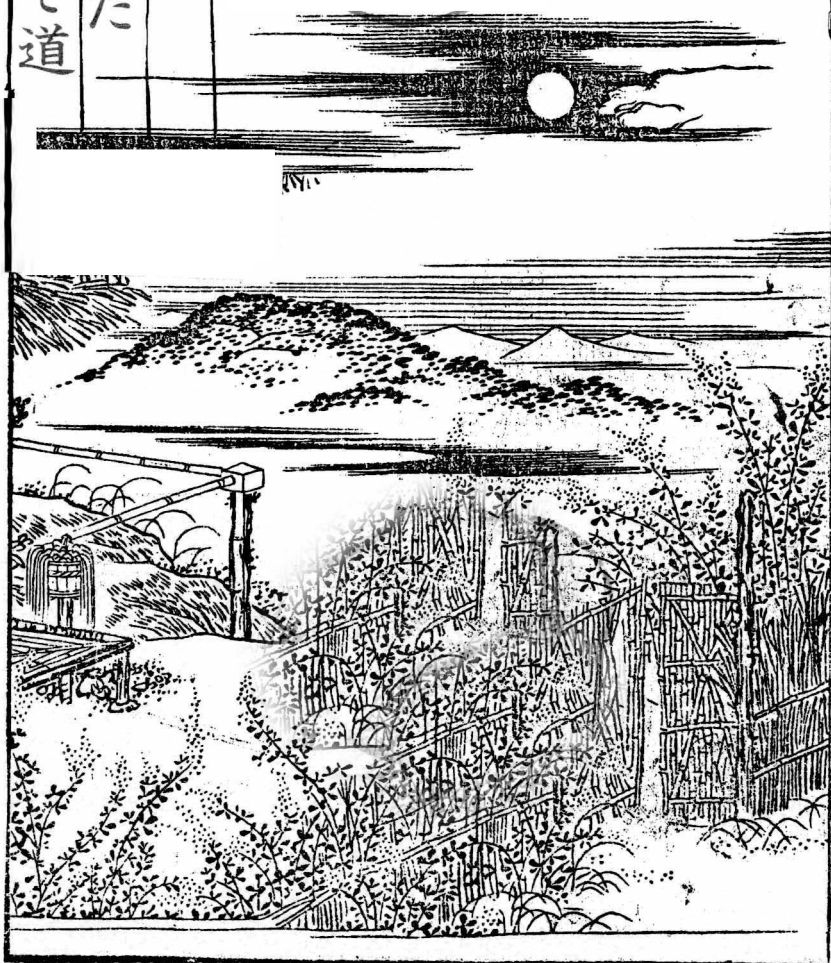
われもまた
おくのほそ道



森 敦

われもまた

おくのほそ道



われもまた おくのほそ道

定価一、五〇〇円

昭和六十三年八月二十日 第二刷発行

著者 森 敦

© 1988 Atushi Mori Printed in Japan

発行 日本放送出版協会

〒150 東京都渋谷区宇田川町四二一

電話〇三三四六四一七三二一

振替・東京二四九七〇一

装幀 司 修

印刷 享有堂印刷所・大熊整美堂

製本 石津製本所

検印省略 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-14-065137-X C1095 ¥1500E

われもまた
おくのほそ道

目次

起	旅立ち〜遊行柳	5
承	白河の関〜宮城野	45
転	壺の碑〜象潟	75
結	越後路〜大垣	143
	おくのほそ道行程図	186

起

旅立ち
ゝ遊行
柳

NHKで「おくのほそ道」という番組をやらせて戴き、幸いに好評を博しましたので、余程わたしが「おくのほそ道」を知っていると思われたのでしょうか。講演を頼まれると、どこからも「おくのほそ道」について話せと言われるのです。わたしは必ずしも芭蕉のように、旅に生涯を送ったものではありません。働くときは大いに働いたのですが、なんとなく生涯を旅に送ったように思われています。そんなところから、「おくのほそ道」をやらせるならあれだということになって、伊丹政太郎さんという方がわたしを抜擢し、あの素晴らしい番組をつくって下さったのです。

しかし、いくらそう申しまして、「おくのほそ道」を知らなければ、NHKがあなたを抜擢するはずがないと言って、主催の方々がきかれないのです。やむなくあらこちらで「おくのほそ道」の話をさせられていますうちに、どこへ行っても「おくのほそ道」を話しているのが、恥ずかしくなって来ました。そもそも文学というものはひとつの生きた世界をつくり、魅了するといって読者をその生きた世界のものにしてしまうことです。そのためには、まず命題を以て読者を密蔽しなければなりません。

密蔽するにはなんといつても構造をつくらなければなりません。しかも、その構造をつくるには物と物、事と事を対応させねばなりません。そればかりか、そうして組み立てられた構造も対応によって、奥へ奥へと組み立てられたものにならないければ、時間が流れたことにならず、生きた世界をなし得ないのです。芭蕉の時代は太平で「旅行案内」のようなものが、数多く出回っていたそうです。それでかどうか知りませんが、

その日は雨が降り、昼から晴れて、そこに松があり、かしこにはなんという川がある。なんてことはだれにも言える。書くからには黄山谷の奇、蘇東坡の新しさを以てしなければならぬ。

と、芭蕉も言っています。

「おくのほそ道」には連句の技法が縦横に駆使されています。連句は正しくは俳諧の連歌というのだそうですが、要するに連想の文学で対応を以てなるものです。しかもこの対応は必ずしも陽を以て陽に、陰を以て陰に対応するものではありません。対句

などのように陽を以て陰に対応することもあるのです。この場合特に陽陰をなすといいますが、陽陰をなすというのも、それによって意味を変容し、変換と呼べるべきものになるところの対応のひとつです。こうして千変万化して来るのですが、それでいて奥へ奥へと組み立てる構造を持つことによって構造に時間が生じ、おのずから起承転結などという型をつくるのです。なぜなら、起に対応するものは承であり、起承に対応するものは転であり、起承転に対応するものが結であるからで、転はほとんど陽陰をなすと言っているでしょう。「おくのほそ道」にしてもむろんそうで、「旅立ち」から「遊行柳」までが起、「白河の関」から「宮城野」までが承、「壺の碑」から「象潟」までが転、「越後路」から「大垣」までが結です。その上、芭蕉はこの起承転結をはじめるにあたって、挨拶ともいふべき序を置いています。まず、その序から読んでみましょう。

序

月日は果てもなく過ぎて行く旅人のようなもので、去っては来、来たと思うと去る年もまた旅人である。

これは李白の「春夜桃李園ニ宴スルノ序」に対応して書かれたもので、李白はこう言っています。

ソウジャ、天地ハ万物ヲ宿スルトコロデ、月日ハ果テモナク過ギ行ク旅人デアル。それでは、芭蕉はなぜ「月日ハ果テモナク過ギ行ク旅人デアル」と書いて、「天地ハ万物ヲ宿スルトコロデ」を省いたのでしょうか。わたしは必ずしも芭蕉がそこまで対応させなくても考えたとは思いません。芭蕉はこんなときもっと大きなものと対応させようとして、敢えて使おうとしないのです。そればかりではありません。李白はつづけて、

人ノ世ハ定メナク夢ノヨウ。楽シモウタツテ東ノ間ダ。ダカラシテ、古人ハ時ヲ
惜シミ灯火ヲトツテ夜モ遊ンダ。マシテイマハ春、霞ガタナビキ、大地ハサマザ
マニ彩ラレテイル。コンナトキ、桃ヤ李ノ咲キ匂ウコノ園ニ集イ会ウテ、コンナ
楽シイコトハナイ。キミヲ若者ハミナ詩ガウマイ。ワシガキミヲ若者ニカナワナ
イノハ残念ジャ。シカシ、キミヲ若者ハ心シズカニコノ眺メヲ楽シミ、マコトニ
清クソノ志アルトコロヲ語リアイ、筵ヲ延ベテ花ニ座リ、盃ヲ交ワシテ月ニ酔ウ。
コレデヨイ詩ガ出来ヌヨウナラ、ドウシテ風雅トイエヨウカ。ソレコソ罰ニ酒ヲ
三斗飲マニヤナランゾ。

と、言っています。ところが、芭蕉の言うところを聞くと、一見まったくまでは言
えないが、変換してしまっているのです。

旅といえばまず舟である、馬である。舟の上に生涯を浮かべて暮らす船頭や、老
いるまで馬の口をとって過ごす馬子は、その日その日が旅であって、旅をすみ家
としていようなものだ。西行といい、宗祇といい、杜甫といい、李白といい、

わたしの敬慕する人たちもみな旅で死んだ。わたしもいつのころからか、ちぎれ雲を飛ばす風にでも誘われたように漂泊せずにいられなくなり、鳴海、伊良湖崎、和歌の浦、須磨、明石と海辺をさすらって、隅田川のこの破れ家芭蕉庵に戻ったのはつい去年の秋であった。それなのに、蜘蛛の古巣を払ってようやく年も暮れたと思うと、またぞろ春立つ霞の空に白河の関を越えなくなった。なにに憑かれたのかもうじつとしていられなくなり、道祖神にでも招かれたのか、取るものも手につかない。股引きの破れをつくろい、菅笠の緒をつけかえ、膝に灸をすえたりしているうちに、もう松島の月が心にかかり、やっと帰りついた芭蕉庵も人に譲って、杉風の別宅採茶庵さいだあんに移った。たまたま芭蕉庵を覗いてみると、譲った人には娘もい、孫もいて、雛も飾ってある。

草の戸も住み替わる代ぞ雛の家

表八句のつもりで採茶庵の柱に掛けて置いた。

それにしても、表八句とはなんでしょう。連句をするときには作法があるのです。横

二つに折った懷紙を四枚重ねて、水引で綴じます。最初の折りを初折りといって、表に八句、裏に十四句書きます。二番目の折りは二折りといって、表に十四句、裏に十四句書きます。三番目の折りは三折りといって表に十四句、裏に十四句書きます。四番目の折りの四折りは名残りの折りといって、表に十四句、裏に八句書きます。そうすると、全部で百句書くことになるので、百韻を踏むといえます。とすれば、表八句のつもりで採茶庵の柱に掛けて置いたということは、芭蕉がこの旅で身を以て百韻を踏む覚悟を示そうとしたのかも知れません。

わたしたちもその覚悟を以てワゴン車に乗りました。清洲橋で隅田川を渡り、そこから下って更に万年橋で小名木川を渡ると、芭蕉稲荷という赤い鳥居のある小さな祠があります。あたりには家が建て込み、ビールの空瓶を入れた黄色いケースを積み上げた酒店があったりしましたが、この芭蕉稲荷のところに杉風の魚見小屋があり、芭蕉はその軒端に芭蕉を植え、芭蕉庵と称して住んでいました。繁華な日本橋界隈にいた芭蕉がこの辺鄙な芭蕉庵に移るについては、俗な生活を捨ててかからなければ、風

雅に徹することはできないと思ったからですが、そうして移って来た芭蕉庵も天和の大火で燃え、やむなく甲斐に流寓しなければならなくなったのです。それを杉風らが尽力して再建してくれたのに、芭蕉みずからが言っているように、鳴海、伊良湖崎、和歌の浦、須磨、明石と海辺をさすらったばかりではありません。たちまちまた、「おくのほそ道」の旅に出ようとして、芭蕉庵を人に譲ってしまったのです。その人に娘もい、孫もいて、雛も飾ってあることが、こころ懐かしかったのでしょう。とりあえず、芭蕉は「草の戸も」と詠んで「酒ヲ三斗飲マニヤナラン」罰を逃れようとしたのです。

旅立ち

三月も明けようという二十七日、あけぼのの空はおぼろに霞んでいる。月はまだありながら夜が明けて、光は薄らいでいるが、富士がかすかに見え、上野、谷中

の桜を見るのはいつのことかと思うと心細い。前の晩から集まった親しい人たちは一緒に舟に乗って送ってくれる。

舟ではむろん別れの句会もしたでしょう。だとすれば、李白の言ったことを思いだされないでしょうか。

マシテイマハ春、霞ガタナビキ、大地ハサマザマニ彩ラレテイル。コンナトキ、桃ヤ李ノ咲キ匂ウコノ園ニ集イ会ウテ、コンナ楽シイコトハナイ。

そればかりではありません。芭蕉はこうつぶづけているのです。

千住で舟から上がり、さアこれからはるかな旅に出るのだと思うと、さすがに胸がふさがる。この世は夢幻のようなものだと思っではいるものの、別れの涙をそそがずにいられない。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

これを矢立の初めとして旅立ちすることにしたが、後ろ髪を引かれるような気がしてならない。みなも道に立って姿が見えるまでとは見送ってくれる。